

楡の里人づくり

ニュージーランド・ソウル 農業・福祉介護視察研修 太田 守 純

三笠地区アグリ同友会一行36名にて、ニュージーランドとソウル農業福祉介護視察研修(平成18年1月6日～1月14日 9日間)について報告いたします。

ニュージーランドは農業国らしく空から見える限り緑の平原で、羊や牛の群れがたくさん見え、時差は日本より3時間早く、今はサマータイムで4時間早く、日が暮れるのは遅く21時30分ぐらいです。

季節は日本と全く逆なので、夏は12月から2月、冬は6月から8月中旬で最も寒いのが7月です。寒さは北海道と同じくらいだそうです。街には、雪はあまり降らないが、周辺の山々は雪が積もります。

ニュージーランドは南半球にあるので日本とは反対に南に行くほど寒くなります。一日の気温の変化が激しいので、夏でも上着が必要になる時もあります。

入国は農業国なので厳しい検疫検査があり、すべての食品が検疫の対象となるので、食料品を持ち込む人は、申告が必要になります。

交通ルールは、日本と同じ左側通行でした。高速道路は通行料金が無料で、車は日本製の車が数多く見られました。

オークランドでは、玉ねぎ・南瓜・人参・馬鈴薯・キャベツ・ブロッコリーなどの野菜を作付けしている農家を、視察研修させていただきました。

有機栽培を行っていて、堆肥は羊の糞を業者から購入して散布していました。労働者はトンガなどの国から働きに来ています。賃金は1時間10ドル～14ドル(日本円で約1,000円)で、労働時間は一日12～13時間仕事をするそうです。



ニュージーランドは19ヶ国の国々へ輸出をしています。日本へは南瓜・玉ねぎなどのより品質の良い物、玉ねぎでは、規格がM・Lの玉の大きい品物を輸出しています。南瓜の輸出国 1は日本で、2が韓国で全体の90%ほどをしめます。街のスーパーマーケットを見ると、外品のような規格の悪い野菜が並べられて売られていました。

人参は、重量75g中5gの糖分が含まれている春人参が作付けされていて、サラダなど生で食べられ人気があり、今が出荷の最盛期でした。

福祉介護視察は、オークランドにある教会で運営している耳の聞こえない人達の聴覚障害施設を視察しました。施設で聴覚障害を持っている人の職業のあっせん・生活面での自立を支援しています。耳の不自由な生活の大変なことを話聞かせてもらいました。

また、オークランドのフランクリン地区の街プケコの住宅地にあるプケコヘレストホームを視察しました。プケコヘレストホームは私営の老人ホームで、大きな食料品店も近くにあり、バス通りに面している便利の良い場所にあります。床数34、23のユニットからなるビレッジタイプの広々とした老人ホームです。施設療養が必要と診断されたお年寄りに、24時間看護サービスを行っており、現在5つのサービスアパートメントを増築中で、19床の増床を予定しているそうです。高齢化による需要に合わせて、さらなる開発を計画中とのこと。なお、入所資格判断するために、老人専門医にかからなければいけないそうです。政府の方針では、安全に暮らせる限り、老人は自宅で生活を継続できるように在宅療養を推進しています。ニュージーランドでも、高齢化が進み、2011年までに、最初のベビーブーム世代が、75歳を迎え、多くの人が老人介護を必要とすると考えられています。現段階で、65歳以上の人が65歳未満よりもどんどん多くなっており、数年先には多くの課題が生まれると心配されています。

和寒町も農業の後継者も少なく、若い人たちの働く職場も数少なく、人口も減少する中、高齢化が進み介護される人々が多くなってくると思います。自分自身毎日の生活を大事に健康な人生を過ごしたいと思っています。

韓国ソウルは、高層ビルが立ち並び都会の華やかさを感じる街でした。日本との時差はありません。日本と同様に四季があり、ソウルは日本の東北地方と同じ気候で、寒さはかなり厳しいそうです。

ソウルでは公営卸売市場の可楽市場を視察しました。可楽市場は、1985年6月19日に韓国最大の公営卸売市場として開場しました。目的は、大量の農水産物の流通を円滑にして適正な価格を維持供給することで、生産者、消費者の利益を保護して国民生活を安定すること。5000余りの企業、2000名余りの流通従事者たちが安全な食品の円滑な供給のために働いています。取引規模は年間230万トン(1日7.487トン)で世界最大の取引物量で、韓国の農水産物流通の中心的な役割をしている市場です。16万4千坪余りの敷地に建物47棟で構成された可楽市場は、青果・野菜・水産・畜産・干し魚・乾物など数多くの品ぞろえで韓国最大の農水産物総合卸売市場です。

ニュージーランドも韓国の農業も日本と同様に、中国の価格の安い野菜におされています。中国では人件費が安いので農産物の価格が低下するのだと思います。私は日本人が日本国内で収穫できる安全安心の食物を食べることが大事だと思います。

日本は食料自給率(カロリーベース)では40%といわれ、世界で下から11番目だとのこと。アメリカは自給率100%だそうです。

日本の農業も自給率を高くして安全安心な食料を供給できる国になってほしいと思います。

町からの補助をいただき、有意義な視察研修をさせていただきました。ご理解をいただいた関係者には深く感謝申し上げます報告と致します。

基金事業報告

『オーストラリアの自然と教育を訪ねて』 浜田 友子

私達「教育を考える会」7名は、オーストラリアの自然と教育を研修目的として、11月の末週に一週間の予定で出発しました。最初訪れたシドニーは、1788年にイギリス人が最初に上陸し開拓した町で旧首都であります。町並みはヨーロッパ調でオープンカフェもあり、2時間ある昼休み時など、のんびりと寛ぐ人で賑わい、その様子は休暇を楽しんでいるかのようでした。あせらず、あわてず、期日があってないのが民族性の一つだそうです。また古い物を大切にすることということもあってか、建物を改築する時は建物の中だけで、外装や外壁を直そうとする時は政府から許可を取らなければならないそうです。

シドニーの町から車で1時間程走ると、ニューサウスウエルズに世界遺産ブルーマウンテン国立公園があります。100万ヘクタールもある広さの中には、古い時代から生息している動植物が数多くあり、ゴンドラから望む景色は息を呑む美しさと期待していましたが、あいにくの雨に、それを堪能することは出来ず残念でした。ですが雨の中「ナラマンパイン」という1億年近く前から生息している大木で高い物では、130メートルを超える物もあるという説明等を聞きながら遊歩道を歩き、それらを一一つ目にした時驚きの感動と一方で安らぎを感じました。かすかな霧の晴れ間から見たブルーマウンテンのスリーシスターズの岩肌をしっかりと目に焼き付けてまいりました。

次に訪れたのはゴールドコーストで、この町はリゾートの町です。町並みはシドニーとは違い建物はカラフルで、空の青さと海の青さを意識しコーディネートされた可愛らしく美しい街です。ここでは今回の最大の目的である「サーファーズパラダイス・ステイトスクール」という小学校を訪問しました。その日の朝、学校側から「訪問時間を長く取ってください。」との要望で、予定時間よりも2時間も長くお邪魔することに成りました。

まずは教頭先生の丁寧な出迎えを受け、授業参観の前に学校についての説明がありました。この小学校は州立の小学校で全校生徒は600名、創立50年の歴史があります。特徴として英語を第2ヶ国語とする子供達と英語を母国語としている子供達とが一緒に学んでいます。オーストラリアの義務教育制度は7年で4学期制です。日本の幼稚園で年長の年に、プレスクールに入学をします。教室と教室はドアが無く廊下もありません。四角い部屋がくっつき合っていると想像してください。もっと驚いたのは教科書が無いことでした。教科書に変わる教材はテキストのみで、これは受身の教育ではなく子供達が積極的に学ぶ事を目的としています。学校運営は基本的には政府で決めています。それぞれの学校長の権限で個性ある教育がなされているようです。1・2年生はジュニア、3・4・5年生はミドル、6・7年生はシニアと分けて、その時期に覚えればよいという考えから、複式学級方式を利用し、学年ごとに分けるのではなく、1・2年生のクラス、2・3年生のクラスもあれば、5年生だけのクラスとそれぞれ自由に組み合わせたクラス編成になっていました。1つの教室に2つのクラスが入って、2人の先生と一緒に教えたり、別々に教えることもあります。一人一人の子供のレベルに合わせた教育を行っているのはこの学校長の方針だそうです。

説明を聞いた後に、クラスを参観させていただきましたが、子供達はのびのびした印象を受けました。ユニークな授業だったのは、昔懐かしいビニールの組み紐で算数の勉強をしていたことです。これは繰り返すということを実践しているとの事でした。明日は父母参観日ということで、教室の隅に絵や工作の作品が並べられていました。親は自分の子の作品を学校への寄付という形で買うそうです。州立の学校なので予算は少ないため、学校の教材や大きな物では体育館までもが募金で建てられたと説明があり大変驚きました。日本の子供達は少なくともオーストラリアの子供達に比べて、教育費においては恵まれた状況にあるとあって過言ではありません。



全学年の各クラスを参観した後、学校長を交えてのミーティングの中で、学校からの連絡事項を黒板に書き、それを子供達が写して親に伝える。それは自分でしっかりと把握して親に伝える義務が在る事や、子供達は、ブルーカードというポイントを12ポイント与えられ、素行が悪ければ1ポイントずつ引かれます。ポイントがゼロになると小学生でも停学になる事など生活面においてのサポートについて話して下さいました。学校は家庭教育のサポーターで、学校内と通学の往復時だけが学校に責任があり全ての責任は親にあると、校長先生は教育の基本を熱く語って下さいました。

私達一行が廊下で説明を聞いている時、手をつないだ1・2年生らしき子供達が来たところ、教頭先生が「子供達が通りますので横へよけて下さい。」と言われました。たぶん日本では、子供達によけて通る様に指導すると思われませんが、私は子供の人格を重んじていると感じました。今度の訪問で物の見方や考え方の違いはその国の民族性と、古くから培われた文化からくるものでは在りますが、我々が良いとしてきた教育も見直す所と、大切にしていかなければならない事を、柔軟な考えを持ってしっかりと見極めていかなければならないと思います。教育と言う事を新たに考え直す良い機会を得た事は、私達「教育を考える会」にとって大きな収穫であり、これを機に和寒町の子供達に何を伝えてあげられるかを整理し考えて行きたいと思っています。今私は新鮮な気持ちでこのレポートを書き終えようとしています。この度研修に後援下さった和寒町に心から感謝いたします。